

生涯学習社会におけるスポーツの在り方についての一考察

—Culture の側面からスポーツを考える—

齊藤 隆志

On Meaning of Sports in The Life Long Learning Society —Cultural Aspect of Sports—

SAITOH Takashi

Abstract

The purpose of this study is aim to discuss the meaning of long life leaning for sports as culture.

The concept of Japanese long life leaing in proposed to emphasis make a balance of professional and general education, which is made with reconsideration of a partial view to leaning to have knowledge.

In general education, it is important to consider leaning to be and culture mean human being.

The concept of culture have both socio-level and individual aspect. These structure are mutual relationship and interdependence at tradition/creation and beautiful enjoy. The tradition/creation mean that a cultural person action to society as good culture. The beautiful enjoy mean self-development by culture.

It is said that Japanese sports is separate into two aspect, such as people consume sports services only as amusement by produced another one ; schools, communities and sports companies. And people do not have enough sense of cultivating society and do not have ability of sports instruct and management.

Next theme is to cultivate both instruction ability and management ability for sports culture in school and social education.

I 問題の所在と本研究の目的

1. 問題の所在

「生涯スポーツ」の振興・充実は我が国の体育・スポーツ施策の重要課題のひとつである。生涯スポーツについての一般的な考え方は、保健体育審議会答申「21世紀に向けたス

ポーツの振興方策について（平成元年11月）¹⁾」にみられる「スポーツの楽しさを味わい、生涯にわたりスポーツに親しむこと」ととらえる場合が多い。この答申における生涯スポーツの性格は、スポーツ活動の持つ以下の側面を重視している。すなわち、

- ①スポーツを目的的活動としてとらえていること、
- ②主観的側面（楽しさや楽しむことによる喜び）を重視していること、
- ③生涯にわたる活動の継続性、
- ④身体運動的側面の4点である。

しかし、このような生涯スポーツ概念をめぐって、いくつかの問題点を指摘できる。まず②に関連して、生涯スポーツ活動例として考えられている、いわゆる地域スポーツやアウトドアスポーツにおいて、本人の楽しみだけを追求し他を省みない個人や組織のエゴイズムによる社会的問題を引き起こすことが、しばしば新聞記事を賑わす。例えば、地域社会では、同一のスポーツクラブが複数の団体名を使い公共体育施設を占領してしまったり、比較的郊外の自然が豊富な森林や海岸ではオフロード専門の4WD車が自然破壊を引き起こしているなどは好例である。

第二の問題点として、③に関連して、「生涯スポーツ」を「生涯」＋「スポーツ」の2つの名詞を合成語と解し、それぞれの意味を検討していくと、「生涯」に含意される「生涯を通した継続性」の意味が、③を除く①－④と整合性をもたない意味であるという点である。継続的实践の意義については、保健体育審議会答申では、健康のためや高齢化社会・余暇社会における余暇時間の有効活用、産業化・都市化に対する身体的又は人間的対応などといった「スポーツが社会適応を目的とする手段的活動」により主張している。すなわち、「スポーツ」が手段であるのか目的的活動かつ主観的活動であるのか曖昧な理解であることが指摘できる。逆に、なぜ生涯に亘り目的的活動をするのかという説明が不十分である。

第三の問題として、④に関連して、生涯スポーツを、身体運動をともなったスポーツ活動、いわゆる「するスポーツ」としてとらえると、最近活発に議論されている「みるスポー

ツ」は生涯スポーツの範疇に入らないのかという問題が起こる。生涯スポーツをスポーツの生活化という視点に置き換えてみると、「するスポーツ」よりも「みるスポーツ」の方がテレビをはじめとする情報社会において、生活化されている。

第四に①から④までを通した問題点として、目的的活動、主観性、生涯、身体運動という側面の四重の強調からスポーツが自己目的的な個人の活動をより強調した意味として浮上し、社会的認識としてとらえづらいつたのではないか。したがって、「開かれた意味での社会（例えば地域社会や国家）と個人の関係」や「自然と個人の関係」を論じる機会を疎くしているという問題点を指摘できる。

この保健体育審議会答申は、生涯スポーツの振興との競技力向上の2本立てになっているが、この答申について、佐伯²⁾は、競技力向上については、その目標、方法、思想が明確で具体的に示されているのに対し、生涯スポーツはビジョンとモデルが不明確であり、具体的な振興施策に新しい発展がみれないことを指摘している。この答申が、スポーツを「人類の文化の中でも極めて重要なものの一つ」として取り上げる画期的なものとして評価が高い反面、競技スポーツ選手の極限への挑戦という意味において、文化としてのより一層の意義があるというとらえ方をし、生涯スポーツの重要性が、産業化、都市化、機械化などの社会的阻害状況への対応として描かれ、文化としての重要性において十分な説明がされていない点にこれまで検討された問題の根源があるのではないか。

2. 研究の目的

先のような生涯スポーツをめぐる問題が生じるのは、まさしく現状の「生涯スポーツ」概念が理念として矛盾や曖昧性を含有した概念であり、未成熟だからといえる。佐伯²⁾が指摘するように、保健体育審議会答申がス

ポーツを「文化」の一つとして意義づけた点に着目し、競技スポーツばかりでなく、むしろ生涯スポーツのコンセプトを文化としてのスポーツの側面からとらえるべきであると考ええる。しかし、彼は、文化をヒューマニティによる豊かさという言葉でくくり、文化とはなにか、さらに、生涯学習と文化の関連について十分に説明されるまでに至っていない。

今後、生涯スポーツ概念を明確に把握し、具体的な施策を講ずるにあたり、なぜ生涯にわたりスポーツを楽しむことが重要なのか、その理由をスポーツの文化的側面から十分に説明される必要があると思われる。そこで、本研究は、生涯スポーツ概念の確立のための一資料を得るために、これからの社会を“生涯学習社会”とし、理想として生涯学習社会におけるスポーツの在り方を文化という概念を通して問うとともに、我が国のスポーツがより理想近づくための課題を提案することを目的とする。

Ⅱ 考察の進め方と本研究の枠組み

1. 考察の進め方

本研究では、以下の①－②－③－④の順に議論を進める。

①生涯学習の基本的考え方（Ⅲ章）

まず、現在の我が国の生涯学習理念を生涯学習審議会の答申から整理するとともにその問題点を指摘する。

つぎに、指摘された問題点について、ユネスコの生涯教育論などを取り上げ、問題点を

解決するような考え方にもとづき、新しい生涯学習観を呈示する。

②Cultureとしてのスポーツ（Ⅳ章）

まず、佐伯が指摘したように生涯学習としてのスポーツを文化の側面から検討するために、レイモンドなどの文化論から Culture の考え方を整理する。

つぎに、生涯学習の考え方と比較しながら、生涯学習としての文化(Culture)の意義、人々の関わり方を呈示する。

さらに、生涯学習社会における人々の Culture としてのスポーツの関わり方と開発されるべき能力について説明する。

③我が国のスポーツの現状（Ⅴ章）

我が国のスポーツのイメージを体育・スポーツ事業を生産する立場と消費する立場とに分け、分析してみる。生産者の立場としては、産業、行政、教育の3つのレベルのスポーツに対する基本的考え方を把握する。消費者の立場としては、市民の市場調査から、人々のスポーツに対するイメージを把握する。

④我が国のスポーツの課題（Ⅵ章）

最後に結語として②と③を比較しながら、我が国のスポーツが理想に向けて、どの様に改善されるべきか、その取りくむべき課題を呈示する。

2. 研究の枠組み

本研究の目的に基づき考察の進め方を研究の枠組みとして以下の図1のように設定した。

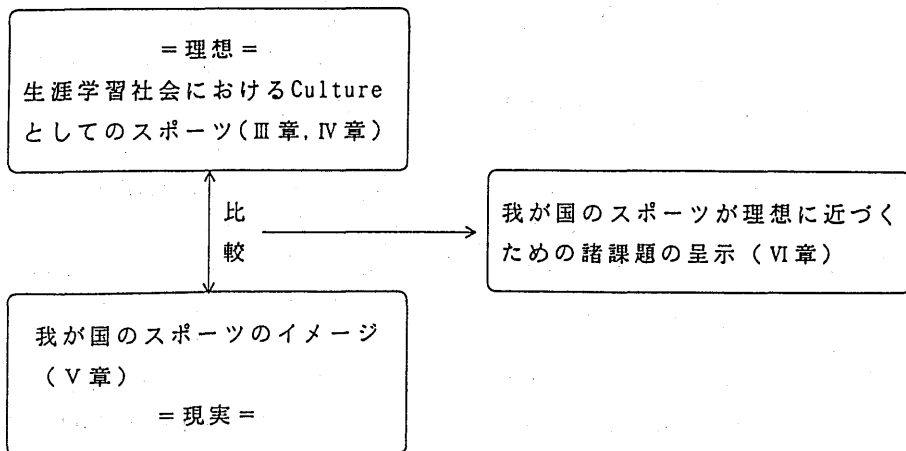


図1 研究の枠組み

Ⅲ 生涯学習の基本的考え方

1. 我が国の生涯学習政策における生涯学習観と問題点

生涯学習審議会答申³⁾では、「今後人々が生涯のいつでも、自由に学習機会を選択して学ぶことができ、その成果が社会において適切に評価されるような社会」を生涯学習社会としてとらえ、このような生涯学習社会を築いていく上で、人々のライフスタイルとして生涯学習を次のようにまとめている（通し番号及び括弧内は筆者が加筆）。

①人々が常に自己の充実や生きがいを目指し、自発的意志に基づき、生涯にわたって学習に取り組むというライフスタイルを確立していくことが望ましい。

②社会の変化に対応して知識・技術を身に付けていく必要があるという観点だけではなく、人間が人間として生きていくために生涯学習が必要である。

③（教育資源：教員や指導者、教育施設が不足するから）仲間と互いに教え合い、励まし合って、学ぶ楽しさや喜びを周囲の人々に広げていく。

④学ぶ人自身の個人としての生きがいとす

るだけでなく、家庭や職場や地域において、人々が共に学び、協力し、励まし合って生涯学習に取り組んでいくことで家庭や職場や地域がいきいきと活気にあふれ、充実し、発展していくことが期待される。

このような生涯学習観に対し次の問題点が指摘できる。

まず一点目は、生涯学習には様々な形態が考えられるが、それぞれがどのような意義を持って生涯学習とされるのか具体的に明記されていない。家庭の主婦がカルチャーセンターで余暇を過ごす場合、社会人が夜間大学院で学習する場合、地域スポーツクラブでスポーツを行う場合、あるいはボランティア活動をする場合など全てを一括して生涯学習としているだけで、より詳しいそれぞれの意義を十分に説明されていない。いわゆる暇つぶしから高度な専門的教育までなんでも生涯学習という概念でくくっているように思える。答申がいうように、我が国の生涯学習が従来の詰め込み型教育からの反省により生まれた考え方であるとともに、生涯学習ニーズが高い割に実際の行動に移されていない点を省みると、人々は、自らの人生において何をどの

ように学んだらよいか十分に理解できるような教育を受けていないと考えられる。したがって、生涯学習が人々の人生の中でどのような形で位置づけるのか、より分化された形で明確にとらえられるべきであろう。

二点目は、生涯学習社会では個人の学習ばかりでなく社会の発展が期待されながらも、社会の発展が人々の協力や助け合いという原因の結果として成り立つような記述をされている点である。人々の助け合いや協力は、社会の発展の一つの重要な要素ではあるが、全てではない。ここに見られるのはあくまでも「一つの要因と結果論」であり、社会の発展を目的とする学習の内容全体が扱われているわけではない。生涯教育から生涯学習へ考え方を変更することにより、生きがいや自己の充実など個人の利益としての学習を重視する考えに移行している⁴⁾が、個人の利益を尊重するが故に、生涯学習社会を助け合いなどの行動レベルの原因とその結果として社会発展を

とらえてしまうものと思える。したがって、生涯学習の目的と内容の関係の中で、社会発展がとらえられるような枠組みが必要と考える。そこで、この2点について詳しく検討してみたい。

2. ひとびとの生き方に基づいた生涯学習の考え方

生涯学習審議会答申に対し指摘した1点目の問題について、学習を人間の存在そのものとしてとらえた代表的な文献にユネスコのフォール報告書が挙げられる。

フォール報告書⁵⁾は、ユネスコの教育開発国際委員会から1972年に提出され、原題を「Leaning to be」と呼ぶ。この報告書では、ロバート・ハッチンスの提唱した学び続ける社会；「学習社会（learning society）」を未来社会ととらえ、その社会での人々の生き方そのものとしての学習、言い換えれば、学習が「to be」「ある」「存在」「生きる」ためのも

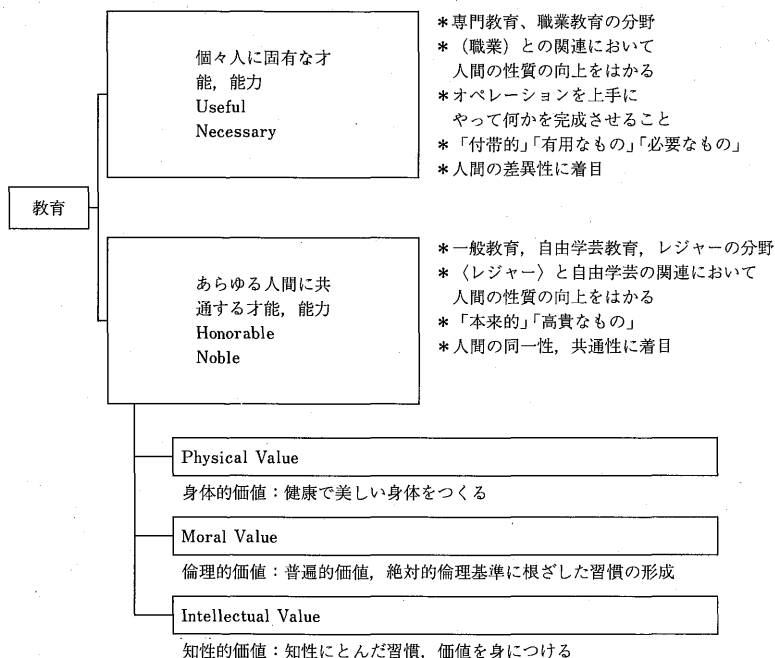


図2 Adler の教育概念

のであることを強調している。

生涯学習の目的を「to be (存在, 生きる)」においた場合、「to be」としての人々の能力や才能はどのようなものか。教育を to be に視点を置いた研究者として松田, 廣川, 藤沢の考えをみている。

松田⁶⁾によると, これまでの教育システムがもたらした知識偏重教育により, 社会は, 人々のものの見方, 考え方, 価値観を必要とせず, 教育内容の本来的価値を取り外し, 全て学歴・偏差値という物差しに画一化させており, ひとびとは, 生きることには無意味な知識として学習している。このような社会に対し, 彼は, M. J. Adler の思想を基本に教育を「個人の固有な才能・有用的価値に基づく専門教育・職業教育」と「あらゆる人間に共通する才能・普遍的価値に基づく一般教育・自由学芸教育」の2種類に分け(図2参照)教育の考え方として提案している。特に, 注目すべきは, 人々の生きる能力とその価値を中心に教育を体系化している点である。

この考えを生涯という人生的時系列に照らし合わせてみると, 次のような関係によって理解できる。

①各世代, ライフステージに応じた学習目的・内容を必要とする場合には職業との関連において人間の性質の向上を図る専門的教育

②各世代を貫通する(むしろ, 時代を超えた)学習目的・内容を必要とする場合に人間の同一性, 共通性に着目した, レジャーと自由学芸の関連において人間の性質の向上を図る一般教育・自由学芸教育

①に対する学習が, 「生活の糧を得るための技術(個々人に固有の価値)の習得」であり, ②に対応する学習に「より人間らしい(人間に共通する価値)生きかたの技術習得」である。

廣川⁷⁾によると, 古代ギリシャ時代は, 人間らしさ, すなわち人間としての善さ, 人間

としての固有の才能の完成を, 生涯にわたり追求していく学習として目指していた。人々は, 人間としての善さや卓越性を目指した生き方の能力を教養と考えていた。しかも本来, この様な能力は, 人間が人間として身につけるべき基本的能力でなければならず, 時代を越えて共通する普遍的な価値観であると記述している。

松田⁸⁾はレジャー (lesure) とスクール (school) の語源が同一のものでともに, ギリシャ語のスコレー (scholē) があたるとし, この普遍的な価値と関わる能力の開発の中に文化と関わる人生(学習)を位置づけている。

藤沢⁹⁾は, アリストテレスの有名なエネルギー概念とキネーシス概念を対立させ, 効率性を重視する自然科学的思考が蔓延している現代社会において人々の忘れてはならない世界観を示唆している。エネルギーとは, 魂・心・精神の活動であり, 目的的行为であり, 物理的時間観念によって規定・制約されない価値観に基づく行為を指す。目的的行为とは, 行為それ自身がそのまま目的にほかならないような行為のことで, 例えば, 思惟する, 楽しむ, 善く生きる, 幸福であるなどの目的的活動を意味する。時間的観念に制約されない価値観とはすなわち, 人の生から死までとか, 世代とか時間的区分を超える普遍的価値観をいう。キネーシスとは, 或る目的のためにできるだけ速く場所を移動する, 人間を物体とみなし(心や価値観を排除するということ)人間の物理運動の効率・能率主義的行為を意味している。この二つの概念を比較する中で, 藤沢はエネルギー的存在が最も人間らしい活動であり, 人々が大切にしなければならない価値観であると指摘している。

つまり, 松田と廣川と藤沢の3氏の意見を総合すると生涯学習には2種類があると考えられる。1つには, 人生の各ライフステージに応じ, それぞれのステージにおいて有用又は効率的な専門的技術を習得していく学習が

ある。それに対し、人間の一生を通じる（世代を越えた）普遍的価値として「卓越した人間らしさ」を求めるようなエネルギー的な目的的活動としての学習がある。そして、このようなエネルギー的な目的的活動として具体的な文化活動が位置づけられると考える。

3. 個人と社会の関係で見る生涯学習

生涯学習審議会答申について指摘した2つめの問題について、社会の発展と生涯学習についてみる。生涯学習論は、1965年にユネスコにより生涯教育が提唱されたのが。始まりといわれる。これまでの生涯教育論が個人の学習を問題にしていたのに対し、ユネスコの提唱した生涯教育理念の基本となったラングランの思想は、社会全体、国民全体の教育として組織していこうとした点について評価されている¹⁰⁾。ラングランのユネスコに対する討議資料¹¹⁾を振り返ってみると、次のように述べている。

「ユネスコは、誕生から死に至るまで、人間の一生を通じて行われる教育の過程—それゆえに全体として統合的であることが教育の過程—をつくりあげ、活動させる原理として生涯教育という構想を承認すべきである。そのために、人の一生という時系列に沿った垂直的次元と、個人および社会の生活全体にわたる水平次元の双方について、必要な統合を達成すべきである。」

この様に、ラングランがいう生涯教育とは、第一に、個人の生涯に亘る統合された教育であること、第二に、社会全体、国民全体の教育を指すものであることが分かる。小橋¹²⁾によれば、ラングランの教育思想の特徴は、古典的な生涯の考え方が個人レベルにとどまっていたのに対し、それを社会レベルに引き上げた点と、さらに、統合（integration）という概念を重視している点であると指摘する。これは、個人の生涯にわたるタテの教育、

すなわ垂直的次元と、個人及び社会全体のヨコの教育、すなわち水平的次元のあらゆる教育の統合を意味している。

1972年よりラングランの後を継いでユネスコの生涯教育部長となったジェルピは、ラングランの教育思想が、社会変化への適応という受動的な発想であったのに対し、学習者自らが責任を持って教育の目標・内容・方法を決定し、自己を指導していく「自己決定学習（self-directive learning）」を提唱した。小橋¹³⁾によると、ユネスコ生涯教育論はジェルピによって、学習者自身による社会変革や自己革新という社会や個人に対する積極的な働きかけを持つものとして発展した。

ラングランが提唱した教育による「個人と社会と教育機関の有機的統合」を目指した点と、また、ジェルピの思想における「自主的な社会変革」という積極的な社会への働きかけの視点が、現在の生涯学習観では十分に押さえられていないと考えられる。しかし、近年になり「国際貢献」、「世界的問題群の解決」、「社会貢献」などの言葉に代表されるように、我が国が国際社会の中でリーダーシップをとり、世界・国際レベルでの指導的立場にならなければいけないという世論がおおい。このような社会的背景を考えると、個人の利益を得る学習や、山崎が指摘するような互いに教え合い学び合う関係^{14) 注1)}ばかりでなく、自己の学習の目的や意義を社会全体の在り方に対応させるような社会への積極的な働きかけや、学習者自らの「個人—社会—教育機関の統合」が重要になると考えられる。

III Culture としてのスポーツ

1. Culture について

昭和63年度の保健体育審議会の答申において我が国では政策上初めてスポーツを文化としてとらえたといわれる¹⁵⁾。しかし、文化としてのスポーツに関する議論では、答申にみられる「①競技選手の人間の極限への挑戦

としての文化」や、あるいは「②運動の客観的側面（運動技術や運動科学）としての文化」^{注2)}としての理解^{注2)}、「③没価値的な視点からみる、領域としての文化」理解^{注3)}「④楽しみの享受としての文化」^{注4)}」の理解である。しかし、これらは、我々がこれまで議論してきた古い生涯学習や生涯スポーツの問題点のいずれかを含む考え方である。①は、生涯スポーツとして意義づけていない。②は、運動として価値づけている。③は、あえて、価値を排除している。④は、個人レベルで議論が終わっている。

そこで、文化そのものが、新しい生涯学習スポーツとの関係において十分に位置づけられるよう、もう少し深く文化概念を検討していく必要がある。そこで、人間らしさという語彙に着目し、Nature（自然）に対するCultureとして文化を理解し、さらに検討を進める。

Cultureを日本語に訳す場合二通りの意味を持つという^{16)・17)}。個人的次元では「教養」、社会的次元では「文化」と訳す。そこで、教養と文化となぜ区別して訳されるのかという点を中心に詳しく検討してみたい。なぜならば、新しい生涯学習観において指摘した個人と社会の2次元の關係にアナログカルに対応してくるからである。

レイモンド¹⁸⁾によると「Culture」^{注5)}とは、歴史的には、まずプロセスを示す名詞として、作物の〈栽培〉、動物の〈飼育〉に使われ、やがて人間に拡大されて知的〈開発〉の意味に使われるようになった。そして、18世紀後半には、主にドイツ語と英語で、特定の人々の生活様式全体を表す〈精神の在り方、総合〉に使われるようになった。

代表的な例では、この時代の哲学者であるアーノルド¹⁹⁾の主張が挙げられる。彼は、18世紀のイギリスの倫理的に荒廃した国情をみて、甘美（sweetness）と光明（light）の調和・統合した理想をCultureとして主張し

た。蜂蜜とその蜜から造られるろうそくのたとえを用いて、甘美とは、個人の主観的な美であり、光明とは客観的な知性を表している。

ジンメル²⁰⁾は、「Kulture」を客観的文化（objective Culture）と主観的文化（subjective Culture）と区別し、前者が手段であり、後者が支配的な終局目的であるとしている。さらに、「Kultureが人間の完成であるとしても、人間の完成が全てKultureであるというわけではない。」あるいは、「自己自身のためだけの存在様式と使命のために人格を堅く守ること」などは、「Kulture」概念の範疇外としている。例えば、個人が自己満足のために絵を描くだけで完結するような活動は、それは「Kulture」ではない。「閉じた単一から開いた多数を通して開いた単一へいたる道程である。」「全体への発展に向かって奉仕することによって、初めて開花されたといえる。」というのである。たとえば絵を描くことが芸術として自己自身に取り入れられ、さらに客観的な芸術文化が発展していく方向に開いていくことによって初めて全体としてのCultureの意義を持つということと理解されるであろう。

ホイジンガ²¹⁾にも類似した主張がみられる。彼は、「Kulture」の基礎条件として「個人を超えた、共同体の所有する一つの理想に志向するための努力を内包している。」とし、「単なる欲望の充足とかむき出しの権威欲の満足の次元を超えている。」さらに、「人間の相互依存という原理が力を発揮することによる、様々な形が義務感から、それだけいっそう純粹に、いっそうみのり豊かに、およそ真のKultureにしてこれを欠くことの許されぬあの奉仕の観念がかたちづくられる。」という点を指摘している。

このようにみてもとおおよそ、「Culture」には二つの重要な視点があると考えられる。一つは、活動そのものが人間としての精神的成長を意味するという点（精神面での人間的

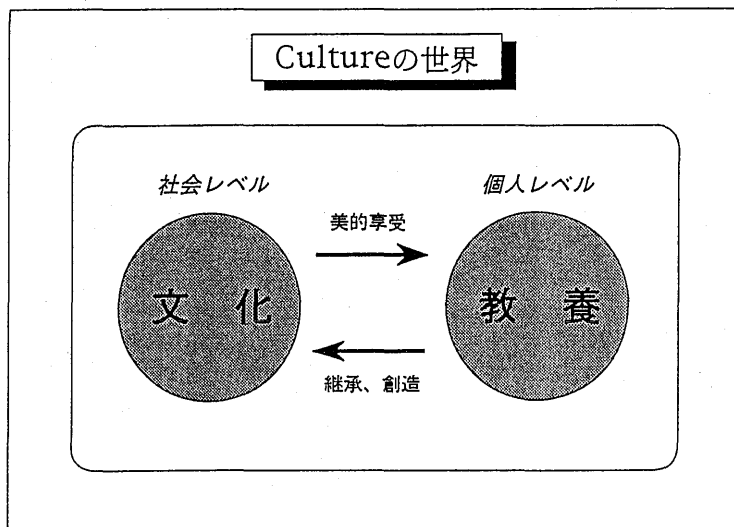


図3 Culture の世界

卓越性)である。二つ目は社会への働きかけや全体性を意識しているという点(社会的存在としての自己),つまり,文化から自分自身への方角と自分から文化への働きかけの両方向が必要とされる点である(図3参照)。すなわち我々は絵画や音楽から楽しみを「享受」することにより精神的豊かさを得るとともに自己実現(新しい自分の発見)する。このような自己実現する享受を美的享受と呼ぶ。しかしそれだけでは,十分ではない。絵画や音楽をより高い全体への理想(Cultureという理想)に向けて働きかけていくことにより,初めてCulture呼べる。このような文化への働きかけは「文化創造」や「文化継承」と呼べるだろう。このような人々の働きかけにより,文化が,単に個人の一世代で完結するものではなく,過去から現代・未来へと次世代へ受け継がれているものであることが理解できる。社会が文化として発展・成長することにより,文化が人類にとって意義のある理想であることを意味している。

ホイジンガは,遊びの中から文化が遊びとして生まれてきたことを論証し,またスポー

ツの遊戯性を指摘したことでも有名である。彼の有名なことば²²⁾「①人間は子どものうちには楽しみのために遊び,②まじめな人生の中に立てば,休養,レクリエーションのために遊ぶ。しかしそれよりもっと高いところで遊ぶこともできるのだ。それが,③美と神聖の遊びである。(下線及び通し番号は筆者加筆)」をみると,人間は3つの遊びの形態(①-③)を持ち,ホイジンガはそれぞれを明確に区別していることが理解できる。楽しみのためだけに遊ぶようなことは未熟な子どもであり,より完成された人間らしい最も高い次元の遊びとして美と神聖なる遊びを位置づけている。神聖とは,我々が受ける神からの恩恵(先の「美と神聖」における“美”)に対する感謝と,感謝の気持ちを行動で示した奉仕の観念である。ホイジンガは,「美と神聖」の次元における遊びの形態がCultureを生み出したのであるとして,逆に大人が子どもの意味において(楽しみのためだけ遊ぶことを彼はピュアリリズムと呼ぶ)遊ぶことは文化を衰退させるとし,そのような遊びを大人が組織的に行うことに対し,警鐘している。

したがって、気晴らしや、仕事のためのレクリエーション^{注6)}としての遊び（そのような意味での音楽やスポーツなどの享受）は、文化の享受としてみなされない。

個人と社会の関係を Culture の側面からみると、文化によって精神が高められた個人が教養人であり、教養人としての市民が精神の高いレベルで結ばれており、そのレベルにおいて市民が指導（教育）・学習による相互依存・相互交換の状態であるような発展型集合体としての社会が文化であるにとらえられる。

2. Culture の側面から見た生涯学習

先に生涯学習審議会答申を基本に今日の生涯学習観を検討していくことにより、生涯学習には新しい2つの観点を指摘することが理解された。すなわち、人生に即した学習観と、個人と社会を統合する学習観の2つである。

まず、人生に即した生涯学習観では、詳しく分析すると生涯学習には2種類があり、1つには、人生の各ライフステージに応じ、それぞれのステージにおいて有用又は効率的な専門的技術を習得していく学習があり、もう一つには、世代を越えた普遍的価値として「卓越した人間らしさ」を求める目的的活動としての学習がある。そして、このような目的的活動として具体的には「文化（Culture）」が位置づけられる。

さらに生涯学習とは個人の利益を得る学習ばかりでなく、自己の学習の目的や意義を社会全体の在り方に対応させるような社会への積極的な働きかけや、学習者自らが「個人－社会－教育機関の統合」していくことが重要になると考えられる。

このような生涯学習の2つの観点に対し、Culture は、まさしく、この二つを統合させるような整合性を持った概念であることが理解されるであろう。まず、「生涯」を「時代を通観する普遍的価値」として位置づけ、「学

習」を「社会全体を基幹においた目的的活動」として自己を成長させていく営み（Cultivate）として位置づけることで理解できる。目的的活動が単に自己実現のみに向かうのではなく、同時に社会や世界の在り方に即した自己を形成し、逆に学習者自らが、社会へ自分を統合させていく働きかけを持つ概念が「卓越した人間らしさ」としての Culture に他ならない。

生涯学習審議会答申に見られるように、これまで人々の生涯学習活動として「学習」「指導」「ボランティア」がそれぞればらばらに独立した活動としてとらえられており、各活動を一括して生涯学習と呼んでいたが、Culture はそれらを有機的に関連づける概念であるといえよう。

3. Culture の側面からみた生涯学習としてのスポーツの関わり方

人々が Culture としてスポーツと関わるには、先の図（図3）で示した Culture の世界の「文化」と「教養」の両方向の関係を全体として認識していることが前提である。その前提の上で、あえて関わり方を類別すると文化の「享受」と文化の「創造」「継承」の3種類の関わり方が考えられる。それぞれにおいて関わり方の具体例の全てを示すことは不可能であるが、我々がイメージしやすいように、できるだけ具体性の高いレベルで例示してみる。

文化の美的享受の側面からみたスポーツの関わり方は、スポーツを享受することによる精神的高まり^{注7)}であるのだから、身体運動^{注8)}にこだわらず、スポーツを「する」「みる」「聞く」「読む」「調べる」などスポーツ独自の様々な楽しみが考えられるほか、さらにスポーツの「写真を撮る」「芸術作品の題材にする」など、他の Culture へと志向を開いていたり、いわゆる「ビフォー or アフタースポーツ」など、いままでスポーツを取り巻

く様々な付加価値的といわれた諸状況を含め、スポーツを材にしたあらゆる関わり方が考えられる。重要なのは、より人間らしく生きるには、いかにしてスポーツと関わり、新しい自己を発見するか、人々のスポーツを通じた精神面での美的な生き方^{注9)}である。つまり、単なる身体的な変化、例えば健康の増進や体力の向上、ストレス解消などを目的とした手段としてのスポーツや、スポーツの運動としての意義は特に議論の対象にならない。むしろ、形態を固定するよりも積極的に人々の倫理や価値観など精神的な視点を重視した社会の文化としての発展に向けて、様々な形態における文化の享受としての広がりや深まりの可能性を開発していくことが重要であると考えられる。

スポーツの文化の継承とは、先の様々なライフスタイルによる享受のノウハウの伝達と考えることができる。いわばスポーツを指導するということになろう。ここでいう指導とは、単に、これまで考えられてきた運動技術指導のような技術の伝達ではなく、Cultureとしての美的享受全般におけるノウハウの伝

達ととらえる。

スポーツの文化の創造とは、それら文化の美的享受と文化の継承を統合する経営的な働きといえるだろう。ボランティアによるスポーツイベントを手伝う、スポーツクラブを育成する、競技会の審判をする、地域スポーツ活動の全体をコーディネートするなどが挙げられる。

重要なのは、これらの行動を支配する精神の在り方である。例えば指導や経営が経済的価値交換のレベルにおいてとらえるならば、それはCultureではない。また、ボランティアが自己満足の次元でもとらえられる場合もCultureではない。むしろ、生涯学習としてのCultureの側面からみた文化の継承や創造とは、社会レベルで人々の精神的高まりを目指していくような意味において人々の「より人間らしい奉仕」の観念の中でとらえられるべきであろう。

これらが発揮される能力をCultureの「享受」「継承」「創造」に対応させると次の3種類に分けられる（図4参照）。すなわち享受能力、指導能力、経営能力である。

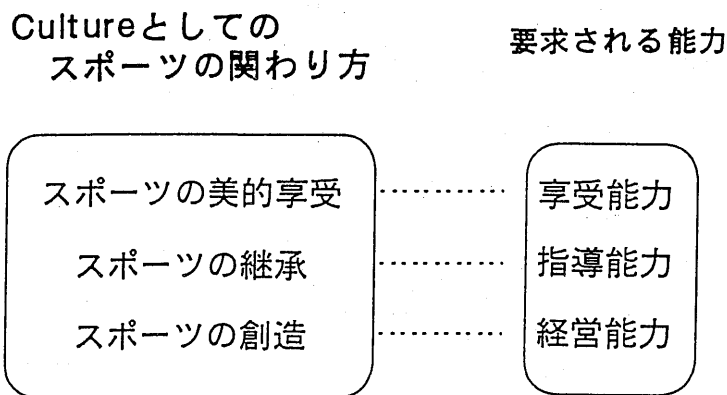


図4 Cultureとしてのスポーツと関わるために要求される能力

Ⅳ 我が国のスポーツのイメージの現状

1. スポーツに対する人々のイメージ

スポーツの「享受」「継承」「創造」というキーワードのもとに行った市場調査の結果より²³⁾、人々が抱くスポーツのイメージを検討してみる。(表1参照)

スポーツ「享受」のイメージは、「スポーツを行うと精神的にリフレッシュする(90.9%)」という身体的効果を認めながらも、「健康の維持や増進のために行う(36.5%)」というよりも、「自由に自分を表現したり、個性的になる時間(65.8%)」であり、「結果よりも参加したり行ったりする過程が重要(55.1%)」であり、「行うことによって得られる達成感が好き(70.6%)」と感じており、スポーツ活動の内在的価値をその活動目的自体に持っているようである。また、「クラブなどに所属してみんなでスポーツを楽しみたい。(55.5%)」と思っている。

これに対し、スポーツの「継承」「創造」のイメージとしては、「スポーツは、人類にとって大切な文化財」であり(85.1%)、「今のスポーツを後世に伝えたい(65.8%)」、「今のスポーツをより善くするためには、人々はスポーツに貢献すべきである(59.7%)」と観念的には積極的な態度を示す反面、「普及することの一役買いたい(24.3%)」「スポーツの行事に補助員として手伝ってもよい(27.0%)」、「スポーツのボランティアをしてみようと思う(28.1%)」、「スポーツを子どもに教えてみたい(25.9%)」といった実際の活動には消極的であることがわかる。

人々の意識全体として、スポーツの関わり方は目的的活動として捉え、スポーツの享受には積極的な志向を示すが、スポーツの継承や創造ではその重要性を認識しながらも実際の活動レベルでは消極的な志向を示すことが理解できる。

表1 人々のスポーツ活動に対するイメージ

| 項 目 | 肯定度 |
|------------------------------------|-------|
| スポーツを行うと精神的にリフレッシュする | 90.9% |
| 健康の維持や増進のために行う | 36.5% |
| 自由に自分を表現したり個性的になる時間 | 65.8% |
| 結果よりも参加したり行ったりする過程が重要 | 55.1% |
| 行うことによって得られる達成感が好き | 70.6% |
| クラブなどに所属してみんなでスポーツを楽しみたい | 55.5% |
| スポーツは、人類にとって大切な文化財である | 85.1% |
| 今のスポーツを後世に伝えたい | 65.8% |
| 今のスポーツをより善くするためには、人々はスポーツに貢献すべきである | 59.7% |
| 普及することの一役買いたい | 24.3% |
| スポーツの行事に補助員として手伝ってもよい | 27.0% |
| スポーツのボランティアをしてみようと思う | 28.1% |
| スポーツを子どもに教えてみたい | 25.9% |

各項目について、「1. あてはまる」「2. すこしあてはまる」「3. あまりあてはまらない」「4. あてはまらない」の4段階尺度により指向の度合いを測定し、「あてはまる」+「すこしあてはまる」を肯定度とみなした。

調査対象；茨城県総和町住民 調査期日；平成3年3月

2. スポーツに関与する産業、行政、教育の現状

(1) 産業におけるスポーツのイメージ

池上²⁴⁾は、イギリスの経済学者ジョン・ラスキンの思想として、財には、それが生命に与える性質である「固有的価値 (intrinsic value)」があり、またその価値が発揮されるかどうかは、消費者の能力や気質である「受容能力 (acceptant capacity)」にもとづくと説明している。さらに、固有的価値と受容能力との出会いが生命を発達させるとき、財は、「有効価値 (effectual value)」を持つ、と定義した。有効価値は、財の文化的価値 (池上のいう美的価値) が、消費者の欲求や財を使いこなす能力自体の質を反映する。松原²⁵⁾によると、社会における文化の水準とは、市民の文化財に対するこの受容能力に多くを依存しているという。すなわち社会全体の文化水準は、市民の文化の受容能力の水準をみればよい。また、ガルブレイス²⁶⁾は、特に非必需品に関して、消費者の選好は主体的に造られる以前に広告によって操作されていると指摘し、消費者の需要 (ニーズ) を生産者が宣伝や販売活動を通じて造出されることから、人々の欲望が生産に依存してしまう現象を依存効果 (dependence effect) と呼んだ。すなわち、市民の受容能力を左右する欲望それ自体が、実は生産者側に操作されているということになる。

では、生産者側がスポーツに対し、どのようなイメージを持っているのだろうか。

我が国のスポーツ産業全体におけるスポーツ財・サービスの生産者側の考え方の代表例としてスポーツ産業研究会報告書「スポーツビジョン21」²⁷⁾があげられる。

「スポーツビジョン21」では、スポーツ産業を文化の担い手としてとらえているが、どのような意味で文化の担い手としているのか、スポーツ産業振興の基本指針をみると、指針として以下の4つを掲げている。

- ①スポーツ享受のための基礎的条件の整備、
- ②身近で多様なスポーツ機会の確保の支援、
- ③豊かで文化的なスポーツ享受の支援、
- ④スポーツ産業の更なる展開とし、

①において人々の楽しみとしてのスポーツを強調しており、また、③においてスポーツマネジメントの確立を指摘しているが、ここではマネジメントの主体が産業側の立場である。これらのことから、「スポーツビジョン21」では、本論で説明した意味と比較すると、文化という意味を、人々の個々の生活をスポーツを楽しむことにより豊かにするという一方向的局面においてのみ使用している。Culture 概念からすると社会性が抜け落ちた、単なる個人の楽しみで完結してしまう意味においてスポーツの関わりを人々の生活の理想としてとらえている。また、スポーツ産業とは、スポーツを楽しむためのサービスや財・施設を生産する産業であると認識していることが理解できる。

このような理想が、ガルブレイスの指摘した依存効果によって、現実には産業側がスポーツの楽しさを享受することを強調することにより、産業レベルにおける人々のスポーツとの関わり方では、楽しさの享受が単なる快楽の追求へと転換してしまうと推察できる。現実のビジネスとしてのスポーツ財・サービスをみると、近年の我が国のスポーツ産業は、楽しさを享受するサービスの過剰が指摘されている。ゴルフ場のサービスなどは好例であり、消費者はただボールを打ち風呂にはいるというスポーツの楽しさを享受する場面だけが経済的行為として成り立っている。例えば草刈やディボットの穴埋めなど個人の楽しみ以外のことは全てサービスが賄う。つまり、消費者はゴルフの楽しさの側面だけと関わっている。あるいは、プロ以外のスポーツ指導者育成の機関が産業として存在しないことも指摘できるだろう。つまり、産業レベルにおけるラスキンのいうところの

スポーツ財の有効的価値は、単なる楽しさ享受であり、経済行為は全てこの価値の交換によって成り立っているといえることができる。

(2)行政レベルにおけるスポーツのイメージ

それでは行政レベルにおけるスポーツのイメージはどうか。行政側の理念的認識は、問題的批判の対象とした、保健体育審議会答申²⁸⁾を省みることにする。まとめると①スポーツを大きくエリートとしての競技スポーツと市民レベルの活動としての生涯スポーツに分けている。②スポーツを文化として意義づけているものの、競技スポーツにおいて大きく意義づけられているが、生涯スポーツでは曖昧にされている。③生涯スポーツは、個人的な楽しさの享受の局面に偏っているとともに、身体運動・活動としてとらえているといえることができる。

これに対し、具体的認識として、行政レベルでの人々のスポーツに対するイメージ形成は生涯スポーツによると考えられるので、生涯スポーツの活動の場である地域社会における、行政サービスとそのサービスを受ける一般市民という関係で検討すると、行政側の市民への過保護と、行政依存の市民体質の相乗効果による、悪しき関係が指摘されている。大木²⁹⁾は全国のスポーツクラブを調査し行政との関係を述べているが、施設の利用、整備、管理や指導など多くのことについて行政に依存しているという。蓮沼³⁰⁾によれば、地方行政も市民サービスが強く叫ばれるようになり、行政が主催するスポーツ教室など各種スポーツプログラムは全てお膳立てが用意されているなかで、市民が楽しむというスタイルで、また、市民も自らがスポーツの場や内容を自発的に用意するような姿勢が少なく、行政に依存している状態であるとしている。

(3)教育レベルにおけるスポーツのイメージ

最後に、教育レベルにおけるスポーツのイメージはどうか。教科体育では、生涯スポーツ能力の育成が中心的課題であるので、生涯スポーツが教育レベルのスポーツのイメージと捉えていいだろう。

教育の理念的認識におけるスポーツのイメージは、昭和60年代から今日において主張されている、楽しい体育論である。運動文化論において主張された運動の客観的側面（運動技術や科学）の理解・達成による人間的喜びから、運動の主観的側面による人間的喜び（運動が好き）に主眼が移行し、生涯スポーツを目指している。楽しい体育論における生涯スポーツとは、文字どおり、運動の楽しさの側面を重視する生涯に亘りスポーツに親しむことである。

具体的認識では、「楽しい」ということが、ただ楽しませておくだけでよいという誤解が生じているなどの指摘もあるが、学習指導要領が自己のレベルに応じた目的を設定する自主的活動を重視しているので、個々人のスポーツを楽しむ能力の育成が図られていると予測される。

3. 我が国のスポーツイメージ

ガルブレイス³¹⁾は、今日の社会（豊かな社会）では、先の依存効果により、物的投資に対する人的投資（教育：主体としての消費者の諸能力開発に対する投資）が相対的に不足するという「投資の不均衡」が生じると指摘している。物的投資とは財・商品の開発などであるが、サービス財も含めてよいだろう。さらに、人的投資は、本来ならば、経済的行為で起こる依存効果を受けず（広告などのマーケティング活動に流されず）消費の主体として高尚な欲望を持ち、人間としての文化的価値を高め、また、投資の不均衡の進行を可能な限りくい止める効果をもつと主張している。ところが、我が国のスポーツをみてみ

ると、教育施策において「投資の不均衡」を是正するというより、教育が物的投資におけるサービス財と同質な意味に転換し、依存効果に拍車をかけていることが構造的に理解できる。

なぜならば、スポーツに対するイメージが、消費者である市民と生産者である産業・行政・教育の3レベル何れにおいても生涯スポーツという装置を通して一様だからである。教育レベルにおいて、「教育→被教育」という関係が教科体育の授業の場面で展開することと同時に、スポーツが自己利益を得ることに焦点が当てられているイメージが背景にあるが故に、スポーツの「教育→被教育」と「サービスの供給→需要」が類義にイメー

ジされ、人々が自分たちにとって「スポーツとは楽しみを受動的に享受するだけのもの」というイメージを持つ。さらに、本来依存効果を抑制するはずの教育レベルまでも含めた産業・行政・教育レベルに、人々のスポーツに対する欲望が依存しているのだから、これらサービスの供給者は、サービスの生産ばかりではなく、スポーツへの価値付けまで担うようになることは十分に推察できる。人々のスポーツに対する有効価値の発揮が、この3者（産業・行政・教育）に機能的に独占する構造になっている。だからこそ、3者が一様なイメージになるわけだが、このような構造・機能が我が国のスポーツのイメージを形成させていると考えられる。

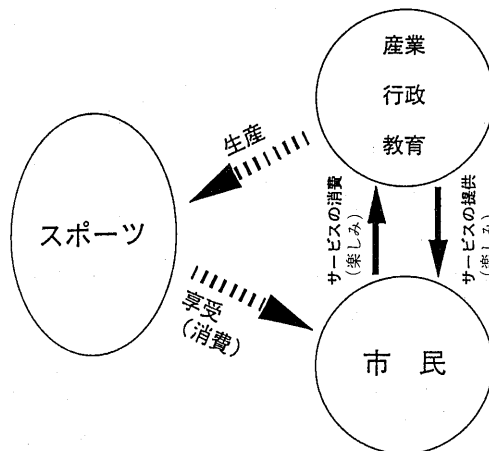


図5 我が国のスポーツのイメージ

以上を図化すると、図5のようになるが、機能面からみるとスポーツの創造がサービスの供給者側に、スポーツの楽しみの享受が受容者側に対応すると考えられる。これは、文化の創造・継承と享受によって形成されるCulture世界とは、対照的に需要と供給という機能分離された仕組みの中で成り立っている。大きな組織がスポーツの価値を決め、指導や教育とサービスが同義に理解され、その

提供を職業的専門職が携わり、人々はスポーツサービスを「生産→消費」の関係のなかで単に楽しみを消費とするというイメージのスポーツが我が国の現状であると理解できる。このようなスポーツは、人々に「自分たちにとってスポーツはどうあるべきか」「生きる上で、社会や自分の生活の中にスポーツをどう位置づけばよいか」など考え、そしてスポーツへ働きかける機会を生じさせないばかり

か、人々の日常生活の中からスポーツが生まれ育たず、またよりよいスポーツとして継承・発展しづらいという点に問題があるといえよう。

IV 結語

ー我が国の生涯スポーツの諸課題ー

図3と図5を比較することにより、我が国のスポーツが理想としてのCultureに近づくために取り組むべき課題を整理し、本研究の結語とする。

(1)明確に把握できるのが、現状のイメージではスポーツ（サービス・財）の創造・継承を産業・行政・教育が担っており、Cultureでは人々が担っている点である。そこで、第一点目の課題として、産業・行政・教育から市民への文化としてのスポーツ創造・継承機能の委譲をあげる。

(2)つぎに、スポーツ市場が拡大するにつれ、受動的なスポーツの楽しみの享受に関する能力は然るべくして産業レベルにおいてより活発に開発されると予測される。ガルブイスは、物的投資と人的投資の不均衡を是正するためには教育が大きな役割を担っていると指摘している。したがって、教育は、人々に対し、スポーツにおける物的投資と人的投資の不均衡の現状及び、理想としてのCulture的側面からみたスポーツの関わり方を観念的に認識させ、スポーツ享受能力を単なる楽しみの享受にとどまらせない状態と、創造・継承に即したスポーツ能力、すなわち、スポーツ指導能力とスポーツ経営能力の開発に力を注ぐべきである。

ここで取り扱われるスポーツのイメージは、身体運動を楽しむことを基本理念としたこれまでの体育とは根本的に異なるので、スポーツを取り扱う教育の全く新しい概念と体系化が必要である。これが第二点目の課題である。

(3)行政は、Culture（創造・享受の相互作用）としてのスポーツが市民レベルで行われるのだから、地域社会における享受と創造の場の提供と組織作りが重点的課題となるだろう。特に、人々が教育において開発された諸能力を発揮する場が期待される。生涯学習社会においては、人々はある時は「指導者」となり、ある時は「学習者」となりうる存在である。この相互の欲求を同時に満足できるようなサービスの相互交換システムの開発が急がれる。教える場や学ぶ場に関する情報のネットワークや、スポーツクラブのような上級者や初級者（上級者が初級者を、大人が子どもを教えるという意味で）が同時にスポーツを楽しむコミュニケーションできる場の育成が具体例として挙げられる。また、このようなシステムも含めて、社会のスポーツ資源や教育資源をマネジメントしたり、コーディネートする能力、すなわちスポーツ経営能力を活かす場の提供もさらに必要と思われる。これが第三点目の課題である。

(4)また、当面解決すべき課題として現在多くの人々が抱く現在のスポーツのイメージや価値観（スポーツは楽しむだけ）を広げ、Cultureのレベルまで引き上げることを目的とした教育方法の開発と啓蒙活動も重要である。これが第四点目の課題である。

(5)以上は、あくまで対処的な課題であるが、最終的には、生涯学習社会のなかで新しく位置づけられたスポーツについて、生涯スポーツとしてスポーツの独自性をもう一度改めて追求していく必要があろう。おそらく、スポーツが身体運動を伴う活動であるので、身体と精神の関係から明らかにされるのではないかと思われる。特に、美的享受と関係して、感性教育といわれる分野とクロスオーバーされながら、スポーツによる美的な感覚を明らかにし、言語化・記号化していく必要があろう。

これが第五点目の課題である。

最後に、誤解をさけるために付記すると、本研究はあくまでスポーツを Culture の側面から検討した理念的提案である。現実の活動では、スポーツは楽しみのために行われていることは事実である。この楽しむことを否定し、義務律だけで行動しなければならないと主張しているわけではない。ただし、楽しみが、高度化し（つまり技能レベルが向上し）、自己実現するという個人のレベルでスポーツの価値が完結してしまうような考え方には反対である。あくまで、学習の目的として「人間らしく生きる」ことを自らが課せられるように、楽しみを美的価値に高め、しかも Culture の創造・継承の側面の精神を大切にすべきであると本論は主張している。人々が体系的に学習を理解すること、観念的に自己規律や義務律を行動や生活の規範とすることは非常に大切であり、また教育が目指すべき理想であると思われる。

引用文献

- 1) 保健体育審議会, 「21世紀に向けたスポーツの振興方策について」(答申), pp 5 - pp 10, 1989
- 2) 佐伯聰夫, 「保体審答申と90年代の学校体育」, 体育科教育 4月号, pp 19 - pp 20, 1990
- 3) 前掲書1), p 21
- 4) 生涯学習審議会「今後社会の動向に対応した生涯学習振興方策について」(答申), pp 5 - pp 6, 1994
- 5) 松田義幸, レジャーとしての自由学芸教育 - M. J. Adler を中心としての考察 -, 体育科学系紀要第14号 (筑波大学), 1991, pp 281
- 6) 廣川洋一, ギリシャ人の教育, pp 12 - pp 63, 岩波書店, 1990
- 7) 松田義幸, ゆとり時代のライフスタイル, pp 104 - pp 106, 日本経済新聞社, 1989
- 8) 藤沢令夫, ギリシャ哲学と現代, pp 160 - pp 191, 岩波書店, 1980
- 9) 小橋佐知子, 「ユネスコの生涯教育理念」, 生涯教育読本, p 46
- 10) 前掲書 8, p 46
- 12) 前掲書 8, p 47
- 13) 前掲書 8, p 52
- 14) 山崎正和, 柔らかな個人主義の誕生, pp 61 - pp 108, 中公文庫, 1987
- 15) 文部省, 平成4年度我が国の文教施策「スポーツと健康 - 豊かな社会に向けて -」, 1992, p 23
- 16) 外山滋比古, 名言の内側, 日本経済新聞記事 (1992年1月12日)
- 17) ジンメル, 文化論 (阿閉吉男編訳), pp 171, 文化書房博文社, 1990
- 18) レイモンド, 文化とは (小池民男訳), pp 9, 晶文社, 1985
- 19) 前掲書16)
- 20) 前掲書17) pp 19 - pp 62
- 21) ホイジンガ, 朝の影のなかに, 堀越孝一訳, pp 40 - pp 50, 中公文庫, 1989
- 22) ホイジンガ, ホモルーデンス, 高橋英夫訳, p 55, 中公文庫, 1987
- 23) 筑波大学生涯スポーツ研究会, 生涯スポーツに関する調査報告書, 1992
- 24) 池上惇, 文化経済学のすすめ, 丸善ライブラリー, pp 77 - pp 106, 1991
- 25) 松原隆一郎, 豊かさの文化経済学, pp 139, 丸善ライブラリー, 1993
- 26) ガルブレイス, ゆたかな社会, 鈴木哲太郎訳, pp 221 - pp 220, 岩波書店, 1990
- 27) スポーツ産業研究会報告書, スポーツビジョン21, pp 1 - pp 13, 1990
- 28) 前掲書 1, pp 5 - p 8
- 29) 大木昭一郎, 地域スポーツクラブ育成上の行政課題に関する研究, 体育・スポーツ行政研究第2号, pp 37 - pp 42

- 30) 蓮沼良造,「実践コミュニティースポーツ」, pp 37-pp 42, 大修館書店, 1992
 31) 前掲書25 pp 325-pp 337

参考文献

- A) 筑波大学体育センターフォーラム” 90報告書, 1992
 B) 中央教育審議会答申「生涯教育について」, 1981
 C) ユネスコ・教育開発国際委員会,「未来の学習」(国立教育研究所内フォーラム報告書検討委員会訳), 第一法規, 1975
 D) ロバートハッチンス, ラーニングソサエティー, 1968
 E) ポールラングラン,「生涯教育入門」(波多野完治訳), 全日本社会教育連合会, 1975
 F) 平澤 薫ら, 生涯スポーツ, プレスギムナスタカ, 1977
 G) 阿閉吉男,「ジンメルの世界」
 H) 奥井智之,「60冊の書物による現代社会論」, 中央公論社, 1990
 I) 多田道太郎,『ホインジンガからカイヨワへ(「遊びと人間, ロジェカイヨワ著」所収)』, 講談社, 1990
 J) 中井正一, 美学入門, 朝日新聞社, 1986
 K) 樋口聡, スポーツの美学, 不昧堂, 1983
 L) 産業構造審議会生涯学習振興部会,「生涯現役・生涯学習社会を目指して」, 1993
 M) 市川昭午,「生涯学習化社会の諸問題」, 国立教育研究所編, 1993
 N) 阿部生雄,「文化としてのスポーツ」, 学校体育9月号, pp 11, 1992
 O) 生涯学習社会における大学体育の役割, 大学体育研究第15巻, 1993

注

注1: 山崎は, 社会が成熟するにつれ, 余暇

時間が増え文化的活動が盛んになるとし, この成熟化と比例するように対人的なサービスが必要となるという。制度的に需要と供給が完全分離するよりも, 互いに教えあい, 学びあうという双方向型サービスの交換により, 互いの存在理由を認めあう対人関係が社会的に要求され, またそのことにより社会の成熟への効果がより期待できるというものである。これまでのも対話型教育など双方向型の教育は提唱されているが, そのような教育方法は, 制度的に, 役割が区別されている(つまり, 教師と生徒という関係)。しかし, 山崎の提唱では, むしろ国民全員が指導者になり, あわせて学習者になるというイメージであり, このような関係が社会で成り立つような社会システムを確立するべきだとしている。

注2: 例えば,『高橋健夫, 体育授業論と授業研究, 体育科教育6月号, 1991, pp 10-pp 13』で「運動文化論」「楽しい体育論」が比較されているが, 教科体育をめぐる「運動文化論」がこれにあたる。

注3: 例えば『佐藤巨彦,「体育とスポーツの概念的区別に関するカテゴリー論的考察」, 体育原理研究第22巻』がこれにあたる。

注4: 例えば,『舛本直文,「身体文化・運動文化・スポーツ文化」, 学校体育10月号, pp 32, 1992. 10』など教科体育をめぐる「楽しい体育論」がこれにあたる。

注5: 引用文献により, 文化と教養を使い分けて訳している場合とそうでない場合の2通りがある。従って, 各訳文中において「文化」「教養」と訳されているもの全て「Culture」「Kulture」として記載した。

注6：勤勉・労働中心の社会観に立つ場合、精神的な心構えとしての「まじめ」は、労働そのものを意味し、遊びは労働的活力を回復される手段と考えられている。そのような意味で、彼は、レクリエーションと使っている。したがって、本論では、「まじめ」を「仕事」と意訳した。

注7：ホイジンガは、スポーツを「遊び」として位置づけ、遊びとしてのスポーツが人類にとって重要であると指摘している。我が国では、その意味においてホイジンガの遊戯論が教科体育をめぐるプレイ論の参考とされるが、彼の著作である「ホモルーデンス」や「朝の影の中で」において、現代社会においてはスポーツが遊びの世界から離れていき、しかも本文で述べた“ピュアリズム”的な活動として非難している。それは、「スポーツの対抗競技が、勝負にこだわりすぎて、精神的なものをすっかり背面に押しやってしまう（朝の影の中で、156頁）」からであり、「スポーツは完全に奉献性なきものと化し、…何ら社会の構造と有機的つながりをもたないものになってしまった。

それは何か実りを生む共同社会の精神の一因子というより、むしろただ闘技の本能だけの孤立的表われなのだ。…オリンピック大会とかが、スポーツを、文化を創造する活動へと高めることができない。」からだとする。この意味からも、Culture としてのスポーツにとって精神的側面の重要性が理解できるであろう。

注8：生涯スポーツと競技スポーツの相異には様々な意見があるが、例えばスポーツの特徴の一つにあげられる「卓越性」の側面から生涯スポーツと競技スポーツを対比させると、精神的卓越性を生涯スポーツ、身体的卓越性を競技スポーツと区別することが可能だろう。

注9：スポーツの美については、参考文献E,Fが詳しい。特に、クロールで泳いでいるときの心持ちに関する中井の記述は有名である。しかし、我が国では、美（すなわち、新しい自分の発見、自己実現）と文化との関係について理解して述べられている文献はない。従って、スポーツの美的享受を単なる楽しみの深まりでしか理解されない場合が多い。